

碁

前

ワキ 東国の僧

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 空蟬

ツレ 軒端萩

地は 京都

季は 夏

次第

「雲井の都はるぐと。く。鄙の長路を急がん。

ワキ詞

「是は東国がたより出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち都に上り候。

道行

「東路の。道の奥なる国出でゝ。く。影もうらゝに出づる日の。雲井は行方はるぐの。海山過ぎて近江路や。関の名なりし白川や。都に早く着きにけり。く。

詞

「是は早都に着きて候。こゝをば三条京極中河の旧跡とやらん申し候。ふる事の思ひ出でられて候。

親にて候ふ者常は源氏物語を口ずさみ候ひし。亡父の情も今更に。物あはれなる折からかな。空蟬の身をかへてげる木のもとに。猶人がらのなつかしきかな。かやうに詠ぜしも此所にての事なるべし。あらあはれなる古跡やな。

シテ詞

「なふくお宿参らせ候はん。柴の庵のいぶせくとも。むかし忍ぶの乱れなれば。軒もふりたる局

の内。弔ふ人もなき跡を。又おどろかす空蟬の。
言の葉草の庵のうちに。思ひ余れる心かな。

ワキ詞

「いや是はたゞ何となく。源氏物語を口ずさみ候ふ
処に。かやうに問はせ給ふ御身はさて。いかなる
人にてましますぞ。

シテ

「いや何となくとはの給へども。こゝは処もふりに
し跡の。其中河のやどりなれば。我も昔のあとな
つかしく。思へば慕ひ出でたるなり。

ワキ

「聞くにつけてもなまめきて。よしある人は黄昏に。
空目なりしは夕顔の。宿こそかはれ。

シテ

「へだてなき。

地

「えにしある。道は妹脊の中河の。逢瀬を知ればう
たかたの。あはれ其夜の方たがへ。今はいづくに
かはるらん。実にや尋ね行く。幻もがなつてにて
も。魂の有りかはなつかしや。く。

シテ詞

「いかに申すべき事の候。今宵は此宿に碁を打ちて。

旅の心を慰めまらせ候ふべし。

ワキ詞

「実にく此所にて。空蟬の碁の勝負の有りし由聞き及びし事なれども。今宵は誰とか打ち給ふべき。

シテ

「あら何ともなや。さて其時の片つかたをば。誰とか知しめされて候ふぞ。

ワキ

「いで其あらそひは。軒端の萩とやらん。

シテ

「さればこそ時しもあれ。折からなれや秋風の。ほに出ですぐる夕まぐれ。露も嵐も下にのみ。

地

「忍べども。軒端の萩の穂に出でく。姿まみ

えん我もまた。今は何をかつゝむべき。その空蟬の羽衣の。しほじみてさめぐと。泣くと思へば

失せにけり。く。(中入)

ワキ歌

「朽ち残る。木の下臥しに旅寝して。く。聞けば声する空蟬の。跡とふ法の様々に。弔ふ縁は有難や。く。

シテ、ツレ二人

「ほのかなる軒端の萩の夕あらし。事とふ秋の夕べ

かな。

ツレ 「消えにし露のかごとをば。何とか聞ける心ぞや。

ワキ 「不思議やなさもなまめける女性二人。あらはれ給ふは如何なる人ぞ。

シテ詞 「うたてと忘れ給へるや。宿まるらせしゆふべの人は。我こそ、れよ空蟬の。

ツレ 「名残ほどなき軒端の萩の。ほのみし人はうらめしや。

シテ 「よしや恨みも中河の。思ひぞ出づる月の夜に。碁打ちて恨みを晴らすべし。

ツレ 「げに、御僧の御前にて。懺悔の姿を。

シテ 「あらはさば。

地 「終にはあらじ生死の。海なれや数々の。浜の真砂の石だて。あらそふも心つよからずや。女の碁の勝負。うつゝなの風情や。

クリ地 「それ碁は定恵の二手を見せ。打つ音に阿吽のひゝ

きあり。されば目の前に。生死の命期をあらはしては。則ち涅槃のかたちを見ず。

シテサシ
「石の白黒は夜昼の色。」

地
「星目は九曜たり。目を三百六十目に割る事は。是れ一年の日の数なり。碁は敵手にあうて手だてを隠さず。わづかに両三目に。従来十九の道有り。ある時は四面をかこまれ一生をもとめ。ある時は敵を攻めいと攻められ。恋しき時はうば玉の。夜

の衣をかへしても。寐ばまやすらん波枕。浮木の亀のおのづから。一目劫なりと。立てゝいかゞ有るべき。されば生死の。二つの河を渡りての。中に白道をあらはし。黒石はよしなや。今打つ五障三従の。女の身には遁れえぬ。業ふかき石だて。心していざや打たうよ。

ロンギ地
「源氏の巻や絵合の。勝負は知らねども。名を聞くも竹川の。ふし有る名を桐壺。」

シテ「箒木の巻の碁の勝負。打ちしめりたる雨の夜に。
手品をいざや定めん。

上地「夕顔の宿に碁を打てば。たそかれ時もはや過ぎぬ。
そらめせし半葩を。おろすや中手なるらん。

シテ「絶ゆまじき。筋を尋ねし玉かづら。止長にいざや
掛けうよ。

地「石は白。名は髭黒の大将の。

シテ「真木柱名をぞ立つ。した煙胸くゆる。火取の灰を

打ちかけられ。ねたやな恋の二道。梅が枝紅梅卷々
の。匂ふもかをるも分きかぬる。身を宇治山の霜
雪の。茂木の下根春さむみ。萌え出で兼ねる早蕨
の。手を見せぬことぞ悲しき。急いで碁を打たう
よ。春一手二手。見ていざや目算せむ。四手五手
六目ぶしとか。七うち八うち九うち。十市の里の
碁の勝負。碁によせて打たうよ。

シテ「碁は千声万声碁は。

地「百度千度万手。空蟬は負けたり。軒端の萩の秋来ぬと。かつ穂に出づる蘆分舟。押すこそ恨なりけれ。

シテ「おさでは叶ふまじき此碁。乱れ心は悲しやな。かくて夜も更け人しづまれば。人影そひて灯の。

地「光る君とて忍寐の。みなしかりける契りかな。

シテ「恨めしと思ひて。

地「世の聞えも空蟬の。もぬけとなりて這ひ出づれば。

衣は跡に身は木がくれてかたはらに泣くく。忍びねもよしなやな。せめて恨の中の衣を。抱き歸りて身に触るれば。今ぞ思ひの小夜衣。そのうつり香もなつかしく。何なかくの思ひ出は。

地「空蟬の。

シテ「うつせみの。羽にこそかはれ軒端の萩。

地「露のかごとは。

シテ「恨めしや。たゞく恋し悲しと。見し事も。夢の

浮橋とだえして。現に返す薄衣。身を空蟬も軒端
の萩も。かれぐに成り行く。跡こそあはれなり
けれ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第六輯』大和田建樹 著